

オーブン カレッジ

「新しい学校のリーダーズ（AG）」というアーティストが登場して10年になります。たまたま「最終人類」や「青春を切り裂く波動」という曲を耳にする機会があり、いつの間にか引き込まれていきました。それで、このアーティストについて少し調べていくと、どうやら「ルールを逸脱せず」に、いかにはみ出すか」にチャレンジしていることがわかりました。

われわれは日々、さまざまな柵（しがらみ）の中に生きています。柵という

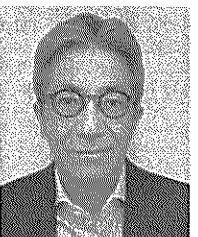
企業変革の源泉としての「日々の実践」

則、そして家族の式たりなどを感じ取り、そういうものを気にしながら生活しています。こうした柵の存在が、会社の経営者の意思決定や行動にも影響を及ぼすという議論が経営学にはあります。経営者は、利潤最大化のために、思うがまま自由自在に振る舞える存在ではなく、業界の慣行や取引先との取り決め、監督する役所が示すルールなどに強く影響を受けるといっています。

われわれを囲むさまざまな柵は、それに配慮して従う限り刃を向けることはいく、むしろ後ろ盾になって庇護（ひご）してくれる場合もあります。ならば社会の約束事（しがらみ）が、自分も参加して見ました。AGも、柵の中でお利口さん

を演じている方が自分にとつてきわめて有利ということになります。逆に、柵を脱して新しい世界を切り拓いていく変革は、現行の中核的な立場から離れた辺境の出入りによるものだとする見方も登場しました。

ルールは守り いかにはみ出すか



名古屋大学大学院
経済学研究科教授
河合 篤男

河合 篤男

しかし、中核的な立場から距離を置く人々が、変革に必要な資源や力をどのように獲得できるのか？ という疑問も浮上するようになったのです。そのような議論の流れにおいて、柵に

真つ向からあらがうとか、辺境に身を置いてその影響を避けるといった極端な説明ではなく、まさに柵の真つただ中に身を置く人々による「日々の実践」に注目が集まるようになりました。

昨年秋に、名古屋でAGのコンサートがあり、自分も参加して見ました。AGのトレードマークであるセーラー服や運動着を着用した方々を数多く見かけました。中には、セーラー服姿の外国人男性も。どこにでもある一般的な制服を着用しているが、その中で個性を生み出していく。これがAGのチャレンジなのだと思われ、会場を包むシンボリックな出で立ちが、かつて自分が若かりし頃、周囲に存在していた夢とロマンに溢れる仲間たちの姿を想起させました。社会化される過程にありながら個性を求める。その強いエネルギーを思い出させてくれるもので、このパワーこそが世の中を切り開いていく原動力なのだと思います。

かわい・あつお 専門は経営組織・経営戦略。慶應義塾大学経済学部、日本生命東京本部を経て、神戸大学大学院卒。博士（経営学）。